



東洋哲学研究所創立構想50周年記念 インド・シンポジウム

「世界平和のためのニュー・ヒューマニズム」より



メッセージ

池田大作

50年前の1961年（昭和36年）2月4日、私は、菩提樹のもとで釈尊が成道したブッダガヤを訪れ、仏教を基盤にした人類の幸福と世界平和のための研究所の設立を構想しました。

その時、私は、この研究所の目指すべき方針として、3つの柱を立てました。

第1にアジアと世界の宗教の研究、第2に法華経の

歴史的・学術的・思想的研究、第3に仏教の「人間主義」「平和主義」の理論的研究、ならびに人材の輩出の3つの柱です。

東洋哲学研究所は、この指針のもと、構想から50年の歴史を刻んできました。その半世紀の間、インドをはじめとする世界有数の研究・学術機関との交流のなかで、東洋哲学研究所は、人類への仏教精神と哲学の

「発信源」として、大きく世界へと羽ばたくことができました。当研究所の創立者として、インドをはじめとして、アジアから全世界へと広がる学術者、有識者の方々の温かいご支援のたまものであると深く感謝しています。

自らの主たれ^{あるじ}

さて本日のシンポジウムのテーマは「世界平和のためのニュー・ヒューマニズム」であると、うかがっています。

ロケツシュ・チャンドラ博士は、私との対談（「東洋の哲学を語る」）のなかで、次のように、「人間主義」に基づく世界平和への道を指し示してくださいました。

「人間の本质は、精神の内面で作用します。精神の内面的広がりがないければ、また、利己心を超越した潜在的な生命への意識がなければ、外面的文明は精気を失ったものになってしまうでしょう。マハトマ・ガンジーは『自身の内面を制御する力に気づかなければ、真に自立することはできない』と、強く主張しました」と。

そして、仏教の視座から、「あらゆる生命に内在する『仏性』を呼び覚ますことができれば、環境、社会、精神のそれぞれの次元で、平和は確かなものとなります」と指摘されています。

「利己心を超越した潜在的な生命」「自身の内面を制御する力」とは、仏教的に表現すれば、万物に内在する「仏性」といえるでしょう。

ガンジーと同じく、釈尊も、利己心や煩惱を制御して、自立する「自己」を指し示しています。

「ダンマパダ」では「自己こそ自分の主である。他人がどうして（自分の）主であろうか？ 自己をよくとのえたならば、得難き主を得る」（中村元訳「ブッダの真理のことは・感興のことは」岩波文庫）と述べ、「ウダーナヴァルガ」でも「賢者は、自分の身をよくとのえて、明らかな知恵を獲得する」（同）と言いました。

そして、入滅に際して、弟子に次のような指針の言葉を残しています。

「この世で自らを鳥とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、

他のものをよりどころとせずにあれ」(中村元訳『ブッダ最後の旅——大バリニッバーナ経』岩波文庫)

仏教者の間で「自島」「法島」として伝わる言葉です。ここに示された「自己」とは、宇宙根源の「法」と一体となった「大我」であり、利己心や煩惱にとらわれた「小我」ではありません。宇宙生命と融合し、一体となった「自己」(大我)こそ、内面を制御する力であり、真に自立した「自己」です。このような「自己」(大我)によって、あらゆる煩惱・悪心を制御するところに、平和創出の原点があることを示したのです。

わが生命は宝塔

さらに、釈尊の悟達の法を表現したとされる「法華経」では、見宝塔品において、生命の大地を割って巨大なる「宝塔」が、この現象世界へと涌出してきます。金・銀・瑠璃等の七宝に飾られていたと記されています。この「宝塔」は、「宇宙大の生命」の表現であり、「精神の内面的な広がり」の象徴です。

この「宝塔」について、日蓮大聖人は、「我が身宝塔

にして我が身又多宝如来なり」(『日蓮大聖人御書全集』1304ページ)と仰せです。さらに、七宝については、「聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝」(同)と言われ、「仏性」を飾る7つの善心であると示されました。つまり、他者の言説に耳を傾け(聞)、根源的信頼心を確立し(信)、慈悲・不殺生等の倫理性をそなえ(戒)、身心が統一され(定)、努力精進につとめ(進)、偏見・差別心にとらわれない平等心をもち(捨)、常に反省を怠らない謙虚な精神(慚)を指しています。このような善心に飾られた宇宙大の「宝塔」——「仏性」が、すべての人々に内在しており、しかも顕在化することができるというのです。

「仏教の人間主義」による世界平和の構築は、ロケツシュ・チャンドラ博士が指摘されるように、まず、エゴイズム、煩惱、無明を打ち破り、利他心、慈悲、智慧、信、勇気等の善心(菩提)を輝かせゆく「人間革命」を原点としています。心、精神の「シャンティ」(平和)の確立です。ここに、真に自立した「自己」が形成されるのです。

その平和の心を確立した「自己」が、人間社会を動かし、戦争、紛争、人権抑圧、貧富の格差を超克しつつ、人類社会を積極的な平和への軌道へと導きゆくのです。「積極的平和」とは、「自己」から現れる「善心の連帯」が、直接的暴力のみならず、その基盤にある構造的暴力にも挑戦し、乗り越えていくところに形成されゆくものです。さらには、宗教・文化の引き起こす文化的暴力にも挑戦し、文化共存の社会を築き上げていくのです。

このような平和社会の構築は、地球生態系との共生への道と一体不二です。つまり、「人類社会」の平和は、その存続を可能にする「環境・生態系」の平和の創出とともに、その輝きを放っていくのです。このようにして仏教の人間主義は、「心の平和」の確立を原点として、「善心の連帯」をつくりあげつつ、「人類社会」と「地球生態系」の平和——すなわち積極的な世界平和の建設に向かうのです。

「戦争と暴力の世紀」であった20世紀から、「平和と非暴力の世紀」を望んだ21世紀の人類文明も、未だに

物質至上主義のなかで、平和と幸福への「精気」を失い、核・戦争、環境破壊から、人間性（善心）の衰退を引き起こし、人間の心、社会、自然生態系を分断しゆく煩惱（悪）のエネルギーの暗躍を許しています。

このような人類文明の動向のなかで、仏教の「人間主義」を掲げる本日のシンポジウムが、物質至上主義、グローバリズムの潮流のなかで失われゆく人間性、善心を蘇生させ、「心の平和」「社会の平和」「生態系の平和」をとものに可能にする真実の「世界平和」を創出しゆく、希望と連帯の「新たな船出」となることを、希求しています。

（いけだ だいさく／東洋哲学研究所創立者・
創価学会インタナショナル会長）